「おまえの家に来る」の表現

町　博光

0．はじめに

琉球語は、B. H. Chamberlain の Essay in the aid of The Ryuukyuan Language (1895) によって、日本語の姉妹語とされた。これ以降、日本語は、東条の区画をはじめとして、本土方言と琉球方言の二大方言として区画されるようになった。本土方言と琉球方言には、著しい相違があるものの同一祖語を有する方言として位置づけられるようになった。

方言として区画されるということは、同一言語に属しているということであり、むしろ類似性が強調されるはずのものであろう。しかし、両方言のあまりの隔たりに、これまで両方言の差異性にのみ注目があつめられてきた。両方言の類似性に言及したものに、わずかに伊波と藤原を見ることができる。伊波は、山口麻太郎の『壱岐島方言集』収載の 2,600 語のうち約 270 語をとりあげて、「琉球語と壱岐方言との比較対照」としてまとめた[1]。藤原は、与論島や沖永良部島の、

○ニャー　ネチャ　イヂランヌ　バジ。
　もう熱は出ないだろう。

のような体言止めの構文が、九州中部以南の方言に聞かれる、

○ミナ　ヤマン　ホーイ　ニゲカタ。
　みんな山の方へ逃げるのだった。

と類似の表現法であることを指摘している[2]。二大方言を分かつ方言区画線をまたいで、九州方言と琉球方言の類似がいくらか報告されているのである。

1．話者基点方言と聴者基点方言

九州方言の話者が、他方言域で生活するようになって、まわりから指摘される方言的な表現に、

○明日おまえの家に遊びに来るからね。

がある。全国共通語（以下標準語）だと、「来る」は、「行く」でないと不自然である。

青木（1990）は、このような場面で、「行く」をとる方言を話者基点方言、「来る」をとる方言を聴者基点方言と呼んでいる[3]。青木は、同論文で、「行く」を使うか「来る」を使うかは、「やりもらい」の「やる」を使うか「くれる」を使うかと同様、個々の単語の意味の問題ではなく方言の類型的な問題だと述べている。青木は、まず二つの類型を英語と比較し、英語を「話聴者複心言語」と呼び、日本語の東京方言のような言語を「話者単心言語」と呼んでいる。さらに話者基点方言と聴者基点方言の類型を日本語の標準語と比較し、話者基点方言と聴者基点方言の地理的広がりおよび歴史的広が

りについても考察している。

地理的な広がりに関しては、大里(1983)の報告もある。大里は、九州方言域内で、「行く」と「来る」の使い分けをする方言が、筑前西、肥後、日向を結ぶ地帯以南に分布しているとする[4]。

以下には、琉球方言も聴者基点方言であることを確認し[5]、さらに奄美諸島の与論島方言を対象に聴者基点方言と考えられる表現を整理し、この種の表現法が南九州方言とつながりがあることに言及する。おわりに、こういった表現法が、個々の単語の意味論的な用法の問題でなく、対者をどのように待遇するかといった表現論的な問題として把握されなければならないことを述べようとするものである。

2. 与論島朝戸方言の例

北琉球方言に区画される[6]奄美与論島方言では、聴者中心的な表現を以下のようにまとめることができる。＜　＞で方言の直訳をしめし、さらに標準語訳を付ける。(　)に話者と聴者を表示する。文頭のグロッタルストップを？、撥音はnで表す。文のアクセントは省略する。

1)「来る」の言いかた

1　?attʃa:satinʃi kju:kutu mattʃurjo:.
(青男→同)
＜明日明後日に　来ること　待っておれ　よ＞
2・3日して行くから待っていてくれ。

2　nja:nu june: ?aʃibinnja kjun do:.
(中男)
＜今日の　方　遊び　来る　ぞ＞
今晩遊びに行くぞ。

3　?ure:ta:ʃikatja: tʃa: ki:de:ru jan.
(中女→老女)
＜あなたがたの(家)へは　いつも　来である　ね＞
あなたがたの家へはいつも(遊びに)行ってるよね。

4　?ittʃi: ?e:tantʃin tudikjun do:.
(青女→同)
＜いつであってさえも　飛んで来る　ぞ＞
いつでも(結婚式には)飛んでくるぞ。

標準語の「行く」に相当するところにkjun(来る)が使われている。与論島方言に「行く」相当のいいかたがないわけではなく、話者個人の「行く」意志を表現する場合や第三者の行動を説明する場合などには?ikjun(行く)が使われる。「ta:ga ?ikjun ga？」(誰が行くのか？)と問われると、「wa:ga ?ikjun.」(私が行く。)と答える。第三者が通るのを見て、「?arja: ?ida:ti ?ikjuntʃi ?eiga?」(あいつはどこに行ってるんだ？)と聞かれると、「pama:ti ?ikjuntʃi ?ei.」(浜に行くところだ)のように応じる。

kjun(来る)表現は、聴者に基点を置いた表現(筆者の用語では、「対者本位の表現」)であることがわかる。

2)「やる」「くれる」の言いかた

5　pe:ku jani jai.(中女→青男)
＜はやく　やれ　やい＞
はやくよこせ、おい。

6　tegaminaga katʃi janjo: ja:.
(老女→青男)
＜手紙など　書いて　やれよね＞
手紙など書いてよこせよ。

7 ʃittaipattai ka:dʒiti ja: njo: han.（青女→中女）

＜ばたばた　掻き集めて　やれよね＞

さっさとかき集めてよこしてよ。

「やる」は標準語では話者本位のぞんざいな言いかたである。「鉛筆をやる」と言えば、「やる人」が主体となった、ずいぶんぞんざいな言いかたである。与論島方言では、「やる」（ja:sjun）にぞんざい感はともなわない。「やる」のはあくまで相手であって、相手が私に対して「やる」のである。

8 ?a:saʃigahata kuriran. mattʃurjo:.（中女→中女）

＜赤さの方が　くれらむ。待っておれよ＞

赤い方の（着物）をあげよう。待っていて。

9 happi: ?urakati kurju:kutu jo:.（青男→少男）

＜この大きさ　おまえに　くれること　よ＞

これだけおまえにあげるからな。

「くれる」主体は話し手である。相手は、「くれられる」立場である。標準語訳だと「あげる」が相当するだろう。

3)「取らせる」の言いかた

10 tuti turatʃi mi:. tandi jaka jai.（中男→同目下）

＜取って　取らせて　みれ。頼む。兄さん　やれ＞

取ってください。頼む、兄さんよ。

11 warabikatinaga mijagi ho:ti turaʃi.（老女→青男）

＜童になど　土産　買って　取らせ＞

子どもなどに土産を買ってあげろ。

12 sai ti:tʃi turatʃi mi:. tandi.（中男→中女）

＜酒　一つ　取らして　見ろ。頼む＞

酒を一本売ってくれ。頼む。

13 ta:tʃi mi:tʃi turaʃi ?ei.（老女→青男）

＜二つ　三つ　取らせ　よ＞

（子どもに菓子を）二つ三つあげなさいよ。

文例10の「取ってとらせ」という重複した表現が、「取らせる」の機能をよく示していよう。「取らせる」のはあくまで相手である。12は、買い物の際の客のもの言いである。「買う」側が相手に「取らせる」ように頼むのである。tandiは、軽い敬意をともなう依頼表現の慣用句である。

4)「おまえは～される」の言いかた

14 duku ?anna. ?utarjun do:.（中女→少男）

＜ひどく　あるな。打たれるぞ＞

あんまり悪さをするな。叩くぞ。

15 tʃanagirarjun do:. natʃibai wuribo:.（中女→少男）

＜手投げられる　ぞ。泣いてばかり　おればよ＞

ぶん投げるぞ。泣いてばかりいると。

16 haʃʃuru munu. pagibuni ?utʃiwurarjun do:.（青男→少男）

＜こうする　者。脛骨　打ち折られる　ぞ＞

こいつめ！足の骨をへし折るぞ。

文例14で、「叩く」のは発話者の中年

女性であって、第三者から「叩かれる」のではない。15, 16 でも「投げる」「打ち折る」のは話者その人である。

「叩かれる」「投げられる」といった受け身表現には、「叩く」「投げられる」といった話者の直接的な意志表現よりも、いくぶんかの相手へのあたりをやわらげる効果が認められる。婉曲に言おうとする表現心意が、それなりの待遇効果を生みだしていよう。

5)「おまえは～させる」の言いかた

17 nuttʃidu waro:ʃu:ru tʃa: ne:.（青女）

＜何てぞ　笑わせる　とは　ない＞

なんておかしい！

18 ʃonʃi waro: ʃu:ru putu.（中女）

＜ほんとに　笑わせる　こと＞

ほんとにおかしいこと！

「おかしい」と感じるのは話者自身である。直接的に「おかしい！」と言うところを、聴者中心の「笑わせて」の表現をとっている。17 の du は係助詞「ぞ」、ʃun の連体形 ʃu:ru で結んでいる。

6)「～なければ、～ないと」の言いかた

19 ?jai. pe:ku ?uirambo:.（中女→中男夫）

＜おい。早く　起きらむばよ＞

ねえ、はやく起きてよ。

20 mahainago: du:ʃi ?arombo:.（中女→青男）

＜御飯茶碗などは　身して　洗わむばよ＞

ご飯茶碗などは自分で洗ってよ。

21 duttʃuiʃi nakurambo:. ?itʃaʃirarjunga tibo.（老女→少男）

＜身一人で　運ばむばよ。如何為られるかて言えば＞

一人で運ばなければ。どうしようもないってば。

22 dondon ʃirannu munu.（老男→複）

＜どんどん　やらぬ　もの＞

さっさとやらないと。

23 gassantʃun kamannu munu.（中男→青男）

＜それ位さえも　噛まない　もの＞

それだけでも食べないと。

仮定的な条件提示の形で文を終止している。「もう起きなければ」「自分で洗わねば」の条件終止は、間接的な命令となる。「はやく起きろ」や「自分で洗え」といった直接的な命令表現よりも、あたりのやわらかい表現となっている。この種の表現法は、標準語においても盛んにおこなわれている。

以上、1）から 6）まで、与論島方言に認められる聴者基点（相手本位）発想の認められる表現を整理した。これらの表現法を取ることによって、控え目なもの言い、婉曲的なもの言いが感じられる。聞き手を中心にという発想が、すでに特定の待遇効果を意図するものとなるものであろう。

方言表現法研究の見地では、このような表現の発想に着目した研究、土地人なりの発想をすくいあげる研究が重要なものとなると考えられる。

3．南九州方言とのつながり

以下に南九州方言のこの種の言いかたを見ていこう。例を、瀬戸口（1976）の発表資料から引用する[7]。

24 オマイゲーナ　ユサイモデセーキモスガ。

あなたの家には夕方にかけて来（行き）ますよ。（集金人）＜中女＞

25 バンニナ　アスビ　コン　ナー。

晩には遊びに来ないかい。＜老女＞

ハーイ　キモン　デー。

はい、来（行き）ますから。＜青男＞

「行く」を「来る」とする典型的な言いかたである。

26 オガト　ワレ　ヤッデ　ワイガタアンヤデ　ウッチャレ。

おれのをおまえにやるからおまえのはあいつにうちやれ。＜中男＞

27 ソン　キオ　ヤレ。オイドミ　ヤレ。

その木をやれ（よこせ）。おれたちにやれ（よこせ）。＜老男＞

相手を中心に据え、自分より高い位置におき、「やれ」と言っているのである。

28 ワイガ　ウダッ　ドネー。

おまえが打たれるぞ（おまえをたたくぞ）。＜中女→小女＞

「おまえは～される」の発想の表現である。叩く主体は話し手の＜中女＞である。いわゆる標準語の表現にも認められよう。

29 ガッチュイ　ワルワセーッ。

ほんとにもう笑わせて（まあ、おかしいったら）！＜青女＞

30 ワイカイ　ベンキョーオ　サセラユライ。コラー。

おまえによって勉強をさせられることだわい。（中女→小女）

「おまえは～させる」の言いかたのものである。

このほか、瀬戸口（1976）では、「相手本位」のもの言いとして、「未来法・完了法をもちいる命令の言いかた」「～するまいぞなどの禁止の言いかた」「～しないでおるの言いかた」などをとりあげている。与論島方言にはこの種の言いかたは認められない。

とりあげた類例から、南九州方言と奄美諸島与論島方言との文表現発想の類似が色濃く認められる。この「相手本位」の文表現発想は、本土方言と琉球方言の方言区画線をまたぐものである。

個々の方言において、文表現発想にもとづく詳細な方言表現法の記述がもとめられる。

4．「賜る」敬語との関わり

相手本位の発想心理の観点から、与論島方言の敬語法を見直したとき、注目すべき事実が指摘される。対者を上位とする「賜る」敬語の存在である。

与論島方言では、taba:ri は、尊敬法動詞としてもちいられ、また謙譲の補助動詞としてもよくもちいられている。尊敬法動詞は、

31 wanukati taba:ri.（中男→老女）

＜私へ　賜れ＞

私にください。

のように直接的に相手から「賜る」ばあいにもちいられる。謙譲の補助動詞としての用法は多彩である。例文を活用形ごとに示す。

32 ?abitikitʃi taba:raran darai.（青男→中女）

＜呼びてきて　賜はららむ　だろうか＞

呼んできていただけませんでしょうか。

33 Fumiti tabe:tan do:ja:.（青男→中男）

＜誉めて　賜へた　ぞや＞

ほめてくださったよ。

34 ?ida:ti ?wa:tʃi tabentʃi ga.（初老女→老男）

＜何処へ　おはして　賜へるてか＞

どこへおいでになっていらっしゃるんですか。

35 ?wa:tʃi tabei.（中女→複）

＜おはして　賜ふ＞

おいでなさい。（あいさつ）

36 wa:ʃinaga keisanʃi taba:ri.（中女→青男）

＜私のなど　計算し　賜われ＞

私のも勘定してちょうだい。

37 katoriʃenko: tʃikiti taba:ri.（中男→老母）

＜蚊取り線香　つけて　賜われ＞

蚊取り線香をつけてください。

32が未然形、33が連用形の用例である。34はn終止形であり、35はri終止形である。36、37は命令形である。taba:riは「〜てください」の「ください」に相当する特定の謙譲補助動詞化していることがわかる。これらの文例において、「賜る」主体はすべて対者であり、taba:riによる表現は、対者を上位に待遇する相手本位の待遇の表現と言うことができよう。藤原（1978）によると、尊敬法動詞「たまはる」系の語は、東北と南九州に色濃く分布し、奄美諸島から沖縄本島につながっている。そのほか、近畿や四国南部にも分布がみられる[8]。藤原（同）では、沖縄本島までしか分布をおさえることができない。仲宗根（1976）によると、宮古多良間や八重山鳩間にタボーリがあるという。また沖縄本島北部与那嶺にもタボーリがあるとしている[9]。

「たまわる」系の語の分布は、南九州から琉球列島諸方言へのつながりを見せてくれる。同時に日本語の聴者基点方言の分布との重なりをも思わせるものである。この事実に、本土方言の敬語法体系で大きな役割をしめる「ナサル」系や謙譲法助動詞の「クダサル」系が南九州方言や琉球方言に見られないことを考えあわせると、さらに両者の敬語（発想）法の類似性が指摘されることとなる。

5．特定謙譲表現法としての対者待遇表現

現代日本語で、「〜してくださいませんか」と「〜してくださいますか」とはていねい度がかなり異なる。両者の品詞上の敬語には、異同も増減もない。しかし、たしかに品位の違いが認められる。このように、ある種の特定の表現法をとることによって、「ていねいさ」をさまざまに表現しわけている。

特定の表現法からなぜ「ていねいさ」を読みとることができるのであろうか。これは、とりもなおさず、いわゆる自己を低めて、その結果相手を高める対者本位の発想が読みとれるからであろう。

飯豊（1977）は「……セテイタダク」の言いかたについて、

「……セテイタダク」（休ませていただ来ます、司会をさせていただきます）は関西から入った表現法だが、戦後しだいに盛んになり、昭和三十年代には

広く用いられるようになり、ラジオ・テレビを通じて今や全国に広がっている。最近では、五段の動詞につけて「ウカガワセテイタダク」「カカサセテイタダク」などという人さえ見られる。

のように説明している[10]。「……セテイタダク」の言いかたは、現在では一般に広く聞かれる表現になっていよう。

藤原（1979）は、この種の特定謙譲表現について、つぎのように説明している[11]。

『月刊琉球文学』第一巻第八号（昭和三五年八月）に、不騎庵<宮良当壮氏>の「風雪」(8)があり、その中に次の記事が見える。

私が「ウサビラーサイ」（押し侍らんや。押しましょうか）というと、車夫は、「ア、助かった」といわんばかりに、「ウシトゥラシェー」（押し取らせよ。押してください）という。

沖縄の首里の坂道で、車のあと押しをする話である。「ウシトゥラセー」が「押してください」の意になるのであれば、「取ラセ」が、今、問題の特定謙譲表現法になると見られる。このさい、「〜取ラセ」は助動詞（補動詞）の地位に立っている。

特定謙譲表現法との言いかたは、旧来の謙譲表現の枠組みをさほど踏み出たものではない。「自己がへりくだる」という謙譲表現の規定でのみ解釈されている。特定謙譲表現を、より積極的に「対者本位の発想がまずあり、結果として話者がへりくだっている」と解釈し直す必要があろう。

6．おわりに

従来、敬語法研究は、外形的な敬語形式にのみ着目してきた。敬語の研究である以上、形式に注目することは当然のことである。しかし、方言対話の世界では、対等者に対しても、いわゆる下位の者に対しても軽い敬意（ていねいさ）の表現がおこなわれている。簡単な言いかた、ふつうの言いかたの中での「ていねいなもの言い」を支える待遇表現として、「対者本位の発想の表現」を位置づけることができよう。

青木が言及したように、発想法による方言の類型化が今後の課題として残されている。

注

1）伊波普猷（1931）「琉球語と壱岐方言との比較対照」（『旅と伝説』四ノ一、『伊波普猷全集』第4巻 1974所収）。結論の部分で、「この稿を草して意外に感じてゐることは、かくもかけ離れた沖縄、壱岐二島の方言の類似が、慶長以後深い交渉を続けてゐる鹿児島、沖縄二方言のそれよりも、遙かに大なることである」と感想を述べている。

2）藤原与一（1969）『日本語方言文法の世界』(pp.85〜86)

拙稿（1977）「与論島朝戸方言における体言化表現法」（『国文学攷』第74号も参照）

3）青木晴夫（1990）「話者基点方言と聴者基点方言：意味類型試論」『文法と意味の間』

4）大里泰弘（1983）「九州方言における「来ル」について」（『九大言語学研究室報告』第4号）

5）沖縄北部に位置する伊江島方言も聴者基点方言だという。たとえば、買い

物に来た子どもに「いくら　いるの？」ではなく ?itʃasa　Fontʃiga.（いくら買おうとしているのか？）と問いかけるという。子どもの身になったやさしい言いかただと説明してくださった。

拙稿（1984）「西表島舟浮集落の方言敬語法」（『広島女子大学文学部紀要』第19号）でも、この種の表現をとりあげている。

6）中本正智（1981）『図説琉球語辞典』

7）瀬戸口俊治の1976年5月の国語談話会発表資料「南薩徳光方言の文表現発想について－対者待遇の発想心理を中心に－」による。なお、瀬戸口（1987）『南九州方言の研究』の「三、鹿児島県揖宿郡山川町徳光方言の方言表現法」（pp.46～pp.158）に「対者本位にものを言おうとする注目すべき発想傾向」のものとして、これらの表現が言及されている。

8）藤原与一（1978）『昭和日本語方言の総合的研究第一巻方言敬語法の研究』の「方言敬語法の研究附図」第3図「尊敬法動詞『たまわる』系の語の分布図」による。

9）仲宗根政善（1976）「宮古および本島方言の敬語法－『いらっしゃる』を中心として－」（九学会連合『沖縄』）

10）飯豊毅一（1977）「現代社会生活における方言・標準語の諸問題」（『標準語と方言』）

11）藤原与一（1979）『昭和日本語方言の総合的研究第二巻方言敬語法の研究続編』

付記

本論の大要は、「第46回表現学会」（於：広島大学）で発表させていただいた。また本稿は、「琉球方言の対者待遇発想の表現」（『日本語学』2001.7）に加筆修正したものである。今回、特に、南九州方言と琉球方言の発想法上の類似に観点を絞り、論点を明確にした。なお、南九州方言と与論島方言の類似については、「与論島朝戸方言の動詞najun（「なる」）の意味記述」（『方言研究年報』続六 1981.10）においても言及している。参照していただければさいわいである。

（広島大学）